

生涯学習に関わる心構え

—真のプロフェッショナルとなるために

内山 充

薬剤師は保健・医療の場で大きな期待を受け、新たな時代を迎えている。薬の専門家としての職責を遂行して信頼を獲得するという目標はいささかも変わっていないが、薬剤師の業務環境は学問の進歩と情報社会化の進展により日々急激に変化している。そして、それらに対応するには、生涯を通じての継続学習が、唯一の有効なアプローチであることは言うまでもない。

そこで、薬剤師が生涯学習によって真のプロフェッショナルとなるために、学習を受ける側も授ける側のものも、また個人としても組織としても、常に忘れないでいてほしい幾つかの事項がある。それは、生涯学習を成功させるための基本的な指針とも言うべきものである。

1. 正しい自己診断が第一歩

どんな企てや試みを行なうにも、己を知ることが重要である。独りよがりの思い上がりや、あるいは逆に劣等感に陥ることなく、自らの能力と適性をしっかりと認識し、自らの現状と将来業務から見て足りないところを積極的に学ぶことを心がける。生涯学習の第一歩は的確な自己評価から始まる。そして、先ず当面の計画を立てることを勧めたい。

2. 情報の有効活用に努めること

現代は情報社会といわれ豊富な情報が提供されているが、多くの薬剤師は、情報の活用に未だ十分に習熟しているとはいえない。いかに新しい情報でもそのままでは、多様な患者相手の薬剤師実務には使えない。研修で得た情報は、単に覚えるのではなく意味づけを正しく評価し、具体的な場面で活用できるよう身につける努力が必要である。さらに、古い経験と思い込みにこだわって、他から学ぼうとしないようでは、意図するところは決して成就しない。分からな

ければ識者に聞く態度が大切である。その際、識者は、正しい判断理由を、根拠を示して十分に説明しなければならないが。

3. 指導は精神主義よりも合理主義で

学習の指導に当たり合理性に欠ける方法を採用してはならない。指導者の心がけるべきことは、先ず模範を自ら実践で示すこと、次に後輩の適性を見出すよう努めることである。薬剤師の業務は、特定の診療科や疾病に携わる場合でも、薬歴や相互作用の観点、あるいは品質の問題など、全方位型の知識を要求されるので、どんな学習も決して無駄にはならない。

4. 責任者は先見性を持つよう心がける

各種の薬剤師集団を預かる責任者は、それぞれの立場で、次の時代に学習の重点をどこに置くかについて、真剣に考えておく必要がある。打つべきところには手を打っておかなければ、不作為の謗りを免れないことになる。薬剤師認定制度認証機構は、生涯研修の義務化を念頭に置きつつ、研修プロバイダーの育成とその質の維持を第一に考え、さらにゼネラリストとしての高い能力と同時に、得意分野の知識・技能を持つような「特定領域認定薬剤師」制度の構築を目指している。

5. 感情や利害による組織内の不統一は禁物

集団としての目標達成には、共通の目的意識と協力体制が必須である。内部で互いに足を引っ張ることがあつては、全体の力が著しく削がれる。薬剤師職域の中で、将来を見据えて優れた研修制度などを実行しようとする努力に対しては、それを阻害することなく育てなければならない。感情や利害にとらわれて、意欲的学習行動の芽を摘むようなことは厳に避けたいものである。

これらの自発的対策を生かした生涯学習により、薬剤師がプロフェッショナルとしてのより高い評価を得られる日の一日も早いことを期待したい。